

## キャプストーンプログラムに見る 地域連携教育の進め方

—— ポートランド州立大学のシニアキャプストーンプログラムから学ぶこと ——

町井 輝久

### はじめに —— なぜ私たちは Senior Capstone Program に着目したか

私の属する北海道大学高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部が設置されたのは1995年で今年10年目を迎える。

研究部の設置目的は「北海道大学の生涯学習機能を高める」研究と実践的な活動をすすめることであった。当初は「リカレント教育推進事業」を中心に大学の持つ知的資源を、公開講座や大学放送講座、衛星通信を利用した公開講座などによって、地域住民の学習機会として活用することをめざした。このような活動を続ける中で、公開講座等を単なる大学から地域への一方的な地域への一方通行のものとして位置づけるのではなく、大学の研究者が地域課題と向かい合い、地域の住民とともに学習するあり方へ発展させる必要があることに気がついた。つまり大学の持つ「学問知」と国民の「生活知」とを統合していくことで大学の研究教育の活性化が進むと考えた。

そのことはOECDが「Learning Region」の中で展開している「大学のもつ教育資源と地域の持つ資源を、生涯学習者の育成という視点から統合的にとらえる」ことでもあった。

生涯学習のための教育サービスはAdult Learnerのためだけではない、大学で学ぶ学生を生涯学習者として育てることが大学の教

育機能としてますます重要になるという考え方に立って、私どもの研究部では大学の一般教育を生涯学習者育成の場として位置づけ、積極的に関わっていくこととした。

そのために1998年から、新入生に将来の進路を考えながら大学での学びを主体的につくっていくことを支援するという位置づけで、産業界や教育・行政機関、医療・福祉、芸術文化などの分野で活躍する卒業生を講師とした特別講義「大学と社会」をスタートさせた。講師には日頃どのように仕事と向かい合っているか、その仕事に就くためにはどのような資質を磨いておく必要があるか、職業人として基本的には身につけておくべきことは何か等を講義していただき、学生には講師の話をもとに大学で将来の夢を実現するためにはどのように学べばよいか考えさせることが特別講義の目的である。「勉強すれば道が開ける」といった受け身の学習者から、「目標を実現するために必要なことを学ぶ」というアクティブな学習者になって貰いたいという期待があった。後期2単位で、毎年10–11人の大企業のトップから入社数年後の仕事のおもしろさや辛さを感じるようになった人達まで、多くの卒業生の協力を得て講義を開講してきた。毎回500名を越える学生が参加する大講義室における講義にも関わらず、良く集中して受講している。ある教育産業誌の各大学の「後輩に聴かせたい」講義ではこの講義が選ばれた。この講義の最後には受講生によ

MACHII Teruhisa 北海道大学高等教育機能開発総合センター

る「私のライフプランと大学での学び」のレポートをもとにした発表会を開催している。明確な目標を持って大学生活を送っている学生は多くはない。10月の講義のはじめに行う進路に関する調査では、毎年学部選択を誤ったと考える学生が20-30%にのぼっている。「獣医学部を希望していたが、成績を考えて経済学部にした」「どの学部と言って良いかわからなかったの、法学部ならつぶしがきくと言われて法学部にした」など曖昧な進学理由の中で、将来の進路を考え大学生活のあり方を考えさせる教育が不可欠となっている。また学生達へのキャリア教育の必要性も増している。こうした教育には現実の社会の体験、すなわち community-based learning が必要不可欠である。

北海道大学では一般教育の中で、先に述べた「大学と社会」の他に、平成17年度からは特別講義「キャリアデザイン」を実施する予定である。また16年度から一般教育科目としてのインターンシップの実施（通常2単位、約2週間のインターンシップ）している。

こうしたキャリア教育を軸とした統合的概念として地域連携教育についてそのあり方についての検討を行うとともに、地域連携教育リエゾンオフィスの設置を要望している。

北海道大学はかつては文類・理類と言うことで学部を越えた交流の中で、1年・2年次を過ごした。違う専門の学生と話し合うことで視野が広がるだけでなく、職に就いてからも専門が違う分野との協力がスムーズであった。しかし学部縦割りになった上、カリキュラムが過密化する中で、発想も人間関係もタコ壺型になりがちである。そのため、1・2年次の全学教育の中で、一般教育演習（23人規模）を必修にし、異なった学部の学生によるゼミ活動を推進しているが、将来の実社会でのキャリアを考えると学部教育の中でこそ違う専門分野の仲間と豊かなコミュニケーションをつくり、チームワークの良さを身

につける必要がある。是非4年次や大学院につながる横断的な学習組織をつくりたいということもあって、我々自身が訪問したり、共同のシンポジウムを行ってきたポートランド州立大学におけるキャプストーンプログラムに大きな関心と期待を持つに至った。

## 1. ポートランド州立大学 (PSU)

“Let knowledge searve the city!” をモットーとするポートランド州立大学 (PSU) は都市型大学（都市研究大学）として全米で高い評価がなされている。

第2次世界大戦直後の1946年に復員軍人法 (GI Bill) にもとづいて創立された PSU は、60ものバラエティ豊かな専攻を誇る総合大学へと成長した。人文科学、社会科学、理工系学科・学部、教育学研究所などの大学院がある。キャンパスはポートランドのダウンタウンにあり、バス・市電 (MAX) など、市内各所へ通じる交通の便も大変便利なうえ、周囲には映画館、劇場、美術館、そしてショッピング施設なども数多く立ち並ぶ。

「都会派大学・PSUの特色をよく表わしているのが、総合芸術学部・School of Fine & Performing Artsだ。学科は建築、美術、音楽、舞台芸術、の4つ。オレゴン交響楽団、ポートランド・オペラ、ポートランド美術館、パフォーマンスアーツセンターなど、地元で活躍する芸術家たちや、文化施設とは特に密接な関係を保っている。音楽学科には、ジャズ研究という珍しい副専攻まで設置されている。実技・理論の両面からジャズを学べるユニークな講座は、アメリカ北西部地区ではここだけだろう。」(インターネットから)

2000年カーネギー分類でも「博士号授与・研究大学」(集中型)として位置づけられ、都市型大学として地域社会への高い使命感と多様な学生を受け入れる教育システムの開発をすすめてきた。

都市型大学とは「地域社会や学生の要望に

敏感に対応する大学」あるいは、「新時代に向け、従来とは異なる特性を持った学生を中心にすえて教育を提供する大学」(Peggy Gordon Elliot “The Urban University”)であり、何よりも重要なことは「大学のメンバーが都市型大学としての使命感をもっていること、そして情熱を持ってその使命を遂行できること」(同上)といわれているが、ポートランド州立大学はまさにその使命感の中で、発展してきた。

## 2. 一般教育改革

### 1) 一般教育とは何か?

ポートランド州立大学では一般教育を「アカデミックの存立基盤としての思考法と価値であり、生涯学習の基礎となる、知識、能力および態度の育成、そして市民教育である」(資料Ⅲ所収、当時の副学長、M. F. Reardon)ととらえている。デューイのいう知的能力を社会的有用性とむすびつけて発展させる考え方である。

Gary Miller は「一般教育とは、自覚的に開発され維持されている包括的なプログラムで、個々の学生に次のことを身につけさせる。調べる態度、問題解決の技能、民主的な社会と結びついた個人とコミュニティの価値などである。さらに、学生が生涯にわたる学習過程を維持するために、これらの態度、技能と価値を応用するために必要な知識、自己完結した個人として民主主義の手続きを通して変化することを約束された社会の全面的な参加者としての機能などである。こうして一般教育は以下のように特徴づけられる。

- ・包括的な視野
- ・学生と社会に直接関連した特殊で現実的な問題の強調
- ・また教育の目的と同様に、教育の方法と手順に民主的な原則を応用すること

(Gary Miller, “The Meaning of General Education”, 1988) としている。

専門教育に関わらない幅広い教養という視点からの従来のリベラルアーツとしての一般教育の問題点は、学生の興味・関心とは無関係に科目・内容が設定され、何よりもなぜ、文学や、哲学、物理や化学を全ての学生が学ばなければならないか、学生にとって学ぶ目的が不明確であり、著しく学生の学習意欲を削ぐことにもつながった。

アメリカの高等教育の歴史は一般教育の改革の歴史といって過言でないほど、多くの大学で一般教育のさまざまな改革に向けての取り組みがすすんだ。

### 2) ポートランド州立大学における一般教育改革

ポートランド州立大学では、1995 年からはじまった全学教育改革の基本を、地域社会とのパートナーシップの上にすすめる、「コミュニティ・大学パートナーシッププログラム」(Community-University Partnerships Program, 略称 CUP)をもとに、大きく変化させた。

このプログラムは、学長 J. A. Ramaley, 副学長 M. F. Reardon, Community-University Partnership の Director であった Amy Driscoll らの強力なリーダーシップのもとに推進された。

当時の学長 J. A. Ramaley は、「ポートランド州立大学は、その使命を達成するための第 1 位の手段として、教育・研究の両面でコミュニティに依拠した学問をしてきた。我々の全ての諸活動におけるガイドラインは、都市生活の知的・社会的・文化的・経済的な質の向上に我々がコミットすることにあると考えてきた。この原則を実現するためには、我々自身がコミュニティの知的リソースの中心的存在にならなければならないし、コミュニティとの相互交流を通して、いかにしたらパブリック・インタレストにあった学問を推進できるかを、学びつつある」として、大学が地

域に貢献するだけでなく、教員も学生の地域からともに学ぶあり方を次のように述べている。

「我々は大学では学問 (discipline) をおしえるだけでなく、それ以上のことをしなければならない。それは実践 (practice) を教えるということである。我々の言う実践とは、あらゆるものを発展進化させる実践 (envolving practice) であり、それはコミュニティの中での経験から生まれるものである。我々の都市空間は拡張された生きた実験室となり教室となる。そこで我々の同僚や学生、コミュニティは彼らの知識・スキル・才能をお互いに結びつけ共同の成果をあげる。このような意味で、教師と学生、大学とコミュニティ、学ぶこととなす事、などの境界は薄らいでいくのである。」(資料 I に所収)

こうした考え方は一般教育だけでなく全ての学生の教育の改革の目標を明確にした。

“Students Searving the City” というポートランド州立大学の教育の目標であり、コミュニティの産業活動や市民生活、コミュニティプログラムに積極的に参加する、“Community-based Learning” が教育の基本となったのである。

こうした改革の背景にはこのような都市型大学の使命観だけでなく、都市型大学であるが故の教育の困難性もあったといわれている。

ポートランド州立大学では、入学する学生の学習意欲や学力の低さ、学生の多様性、働きながら就学する学生の多さ、出身階層の低さ etc により、卒業時には入学時の 1/4 まで減少してしまうという学生のドロップアウト率の高さが問題となっていた。学生に学ぶ意欲を持たせ、学ぶ目的を明確にするためには、自分自身の学習を学ぶ意味と目的の両面で理解させる一般教育改革が不可欠であったのである。

### 3) 一般教育改革の目標とゴール

CUP (地域・大学間パートナーシップにもとづくプログラム) にもとづく改革は、4 年間を通した新しい一般教育カリキュラム、University Studies として定式化された。

University Studies は「統合された学習経験」のための一貫教育プログラムである。ここでは学生は 4 年間、専門教育と一般教育を 2 つの柱として学ぶことにより、専門を生かしながら、他の専門分野と共同し、実際の社会のさまざまな諸課題や解決方法や協同のあり方、さらに専門知識の担い手としての社会的責任を自覚することをめざす。専門を生きた社会に生かす方法を学ぶのが、一般教育であるとも言える。したがって、3・4 年次も専門学部の中での学習ではなく、1 年次からのさまざまな専門分野の混合化された学生集団をグループとして形成し、高学年の指導者 (メンター) のもとに、学生の選択・提案を重視しながら課題研究を進めるところに特徴がある。

ポートランド州立大学に入学した学生は 1 年次からどの学部の学生も図のような順序で University Studies と呼ばれる一般教育を参加する。

4 年間一貫した一般教育プログラム University Studies は次のようになっている。

第 1 年次 Freshman Inquiry

第 2 年次 Sophomore Inquiry

第 3 年次 Upper-Division Cluster

第 4 年次 Senior Capstone

University Studies は明確な目標とゴールを掲げている。目標は「学生の中に、生涯学習の基礎となる、知識、能力、態度 attitudes を助長すること」とされ、生涯学習者 (Life-long Learners) を育てることで、そこで身につけるべき資質はゴールで次のように明示されている。

〈University Studies のゴール〉

ゴール 1 Inquiry and Critical Thinking

### 探求とクリティカルシンキング

ゴール 2 Communication

ゴール 3 Human Experience 人類の経験  
(文化的多様性と多文化主義)

ゴール 4 Ethical Issues and Social  
Responsibility 倫理的課題と社  
会的責任

4つのゴールは学生が身につけることを期待される資質である。教えられた知識の吸収者でない、アクティブに学び続ける存在としての Lifelong Learners を育てることが一般教育の目標といっても良い。

## 3. キャプストーンプログラム

キャプストーンプログラムは4年次の一般教育プログラムであり、University Studies の仕上げでもある。今日では Senior Capstone と呼ばれている。実際には4年制だけでなく、大学院生もこのプログラムに参加している。

ポートランド州立大学 Senior Capstone プログラムを理解するためには、今回の改革のもとになる、Community-University Partnership (CUP) Program と Community Based-Learning について理解しておく必要がある。Community-University Partnership Program (CUP) は先にも見たように、ポートランド州立大学における研究教育の両面でそのあり方を規定するものである。このプログラムのオフィスだけでなく、学内外にさまざまなリエゾンオフィスや仲介機関、コミュニティカレッジなどをも含むコンソーシアムの存在が、このプログラムを支えている。小出達夫氏は次のように述べている。

「コミュニティ組織と大学とを結び、コミュニティに派生する問題を大学にあった形で連携し、解決していくことをめざしている。この組織の存在がキャプストーンプログラムを維持していく上で決定的な役割を果たしている」(小出, 資料Ⅱ所収)

一方コミュニティベースドラニングは一般教育だけでなく専門教育における重要な位置を占めている。専門教育における Community Based-Learning Course は Community-University Partnership Program (CUP) のキャプストーンプログラムとならぶもう一つの柱として大学の中で位置づけられている。主に学科レベルで教員・学生がチームを作り、コミュニティの課題に対応したプログラムを実施している正課として単位の対象となる学習である。

さてポートランド州立大学のキャプストーンプログラムの考え方、進め方については次の3つのハンドブックを見ると良く理解できる。

- ①Senior Capstone Faculty Handbook
- ②Senior Capstone Student Handbook
- ③Senior Capstone Community Handbook

このハンドブックは現在もインターネットで見ることが可能である。3つのハンドブックが出されていることからわかるように、このプログラムは学生、教員とともに、企業や行政、各種機関、民間団体等コミュニティの共通の理解にもとづくパートナーシップがあって初めて効果を上げることができるプログラムである。

学生向けのハンドブックでは「What is the Senior Capstone?」としてその特徴及び意義について次のようなことが指摘されている。

「シニアキャプストーンコースはPSU学生の一般教育プログラムの4年次の間とりいれられている。キャプストーンプログラムはしばしば、インターンシップやボランティアなど他の形のコミュニティサービスと混同されている。学ばれるべき意図はコミュニティサービスや、インターンシップ、ボランティア、体験学習から区別される。

(中略)キャプストーンはアカデミックなカリキュラムの中に統合され、学生達に読むこと

や書くこと、話すこと、聞くこと、討論することなどを通して彼らの体験をクリティカルに考える構造的な機会を提供する」

キャプストーンプログラムの目的についてハンドブックでは次のように述べている。

- 1) 自らの専門領域で学んだ技術・知識を現実社会に生起している諸問題に適用すること
- 2) 異なった学問分野から来る学生と協力して、学際的なチームワークを組んで働く経験をする
- 3) 学生達が自分たちのコミュニティに積極的に参加する機会を与えること

またキャプストーンプログラムの意義と関わって次の目標が述べられている。

①学生に4つの力をつける

Critical Thinking

Communication

Human Experience and Diversity

Social and Civic Responsibility

- ②大学卒業後の進路、やりがいのある仕事の認識、自分のキャリアコースを見通す力
- ③自分の研究・学習課題の発見、
- ④多様な専門分野の学生とのチームワーク、社会人との連携
- ⑤多様な文化、多様な生活との出会いと世界の拡大
- ⑥リーダーシップの育成
- ⑦実際の社会の課題を認識し、専門職としての関わり方を学ぶ
- ⑧責任ある市民性……民主主義の担い手の育成

このようにキャプストーンプログラムは学生が各学部での専門教育を学ぶ意味をつかみ、専門をどのように現実社会で発揮するかを学び、専門がどのような社会的責任の中で遂行されなければならないかを学び、民主主義社会の担い手としての責任ある市民性を育てることが重視されている。とりわけ産業技術と環境の関係など「専門がどのような社会

的責任の中で遂行されなければならないかを学ぶ」ことの重要性が大学でのヒヤリングの中でも強調されていた。

巻末の表はどのような活動がキャプストーンプログラムとして行われているか、共同研究者である小出達夫氏がまとめ翻訳したものである。

キャプストーンプログラムは企業や地域団体等との連携で行われるために、プログラムは次の5類型に分けられている。

- ①営利団体（ボーイングなど地域に立地する企業）
- ②非営利団体（環境団体、NPO、社会サービス団体、YWCA など）
- ③政府系組織（環境組織、治安組織、社会サービス組織、教育組織）
- ④教育施設（ポートランド市の公立学校等）
- ⑤ポートランド州立大学（キャンパスもコミュニティである）

きわめて幅広い機関や団体と連携しながら多様な地域課題に取り組んでいることがわかる。

このプログラムのコーディネーターであるドリスコル氏はキャプストーンプログラムをどのようにすすめるか次のように述べている。

「これ（＝キャプストーンプログラム）は学士を取得する学生すべてにとって必修である。いろいろな学部学科（majors）から学生が来る。ひとつのコースに多様なMajorsの学生が集まる。音楽、文学、教育などと多様であるが、こうした学生がひとつのグループを作る。（ひとつのグループは6－30人ぐらいでプロジェクトによって異なる一筆者注）

そして地域にある問題を多面的に検討する」

「二つの郡の黒人協会から『我々の子どもたちの状態』を調べて欲しい、という要請があった。これには30人の学生がキャプストーングループを組んで対応した。」インタビューをや

り、調査をし、資料を集めて、最後にレポートを書き上げ、それを本にした。これがその本である。これには半年かかった。できた本は黒人協会だけでなく、ポートランド市や市の政治的リーダー達に配布した。印刷費は大学と黒人協会から出た。」

「最近の例で言うと、ことし動物園と協力した素晴らしいキャプストーンプログラムができた。春になると動物園には小中学生が多数来る。そのゴミの処理費用は莫大で通常の3倍になる。この問題にどう対処するかがテーマであった。学生グループは6人でつくられた。教育学2人、環境科学2人、地理学と言語学が各1人だった。彼らはゴミを計り、吟味し、区分した。その結果ゴミのでない弁当の包み方などといった、ゴミを増やさない方法や堆肥になるものの捨て方、堆肥づくりの方法などをまとめ、報告書をつくった。その結果ゴミ処理費用は半分になった。これはコストなどの経済的効果だけでなく、家族や子どもへの教育的効果も大きかった。」

「学生は大学に入る前にくらべ、地域についての知識をはるかに多く増やしている。自分の周りだけの知識でなく、より広い知識を地域について持ってきている。このことがまた自己認識を深めている。学生は地域の中で、他の文化への偏見や恐れ、力などに触れる。そして学生は自分のキャリアゴールを深めることになる。あるいは自分の専攻を変えることもある」

「キャプストーンは事前の計画がしっかりしていないとだめなので、そのテーマなどはカリキュラム委員会のレビューを受ける。この手続きは私のオフィス（Community-University Partnerships Program）で地域から受け付けたものをコーディネーター達と検討し、その後このプランをカリキュラム委員会に出し、レビューを受け、その上で学生達に提示する」

「キャプストーンを指導する教員は大学全

体から出てくる。彼ら教員の使命は〈Instructor〉ではなく、〈Facilitator〉である。リサーチスキルの指導、プランニングの監督、テクニカルレポートの書き方などが主な仕事である。あくまでキャプストーンプログラムは学生のリーダーシップが中心であり、重要となる」（以上は資料Iに所収）

この引用からポートランド州立大学で実施されているキャプストーンプログラムのイメージがかなり具体的に見えてくる。

「今年（1998-99）のキャプストーンプログラムには、70のパートナーがあらわれ、1500人の学生が参加する。学生は2学期間にわたり、合計6単位を取得する」（資料Iに所収）

このように一般教育改革の仕上がりとして実施されるキャプストーンプログラムは一般教育のあり方だけでなく、生涯学習者の育成という明確な目標の下に、学ぶ意味、学ぶ責任を理解しながら、将来の進路とそのための大学における学びについて自覚させる、大学教育改革の全体に関わるものとして位置付けている。

このキャプストーンプログラムをわが国大学で実施するとき留意すべきいくつかの課題がある。

- a) 専門教育と並立する形で4年まで積み上げられるカリキュラムであること
- b) 専門の卒業研究と Senior Capstone の課題とが4年次に集中すること
- c) 学部教員の意識改革——改革の理解
- d) 地域課題を研究する研究機関が大学内に設置されていること

またこのような Community-Based Learning を実施するためには、地域の機関や団体及び個人と大学を仲介するリエゾンオフィス、大学と地域ニーズを結ぶ各種の中間的機関、大学と地域社会との日常的なネットワークが必要不可欠であることも留意すべきである。

## 最後に

私たちの北海道大学生涯学習計画研究部でも「学生を生涯学習者として育てる」という視点から本学に適したキャプストーンプログラムのあり方について検討してきた。

理工系学部においては学部教育が大変過密である上、卒業研究だけで手一杯という声もあり、4年次まで一貫した一般教育の実施はなかなか難しい上学部を越えた横断的なプロジェクトチームをつくることは大変難しいなどいろいろ課題がある。何よりも、コミュニティベースラーニングについてもまだインターンシップが始まったばかりである。そこで当面はいくつかの試行的プログラムを実施しながら、本学での可能な方法について検討していこうということになった。そのひとつとして札幌市の生涯学習活動の一環である「さっぽろ市民カレッジ」と連携したキャプストーンプログラムを試行してみようと言うことで昨年から教育学部学生及び教育研究科の大学院生と札幌市立高専の教員とで、まちづくりをテーマとしたキャプストーンプログラムを試行した。これについてはまた別の機会で報告したい。

本稿は、小出達夫氏を代表者とする「オレゴン州の School-to-Work」に関する一連の

科学研究費補助金及び北海道大学教育学部とポートランド州立大学の School of Education との間のシンポジウム (1999) および私の属する高等教育機能開発総合センター主催の国際シンポジウム (1998) の記録をもとに行った札幌学院大学での研究会報告 (2004) をもとにしている。インターネットからとったキャプストーンプログラムに関わるハンドブックを除けば多くの資料は小出達夫氏が翻訳した下記の文献資料によっている。

### 資料 I

小出達夫「大学・地域・教育改革（資料と解説）——ポートランド州立大学の地域連携教育プログラム」『生涯学習研究年報』第6号、1999

### 資料 II

北海道大学高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部報告書『大学教育における大学・地域連携の意義に関する実証的研究——ポートランド州立大学のキャプストーンプログラムと北大』2001

### 資料 III

Michael Reardon「ポートランド州立大学における一般教育改革のケーススタディ」『高等教育ジャーナル』第3号、北海道大学高等教育機能開発総合センター 1998

表 ポートランド州立大学におけるキャプストーンプログラムの事例 (1995-97, 97-98)

(小出達夫氏訳)

#### (1) 95-97 年度における事例

Capstone 担当教員	Dept. (所属)	Capstone Title (テーマ)	Community Partner (地域連携組織)	Project (学習プロジェクト)
T. Bulman D. Johnson	地理学	"Applied Field Work in Geogra- phy"	Portland 公立学校 Oregon Geogr. Alliance	ポートランド都心での k-12 学年教師の フィールド活動のガイドを作成。
P. Chen (Prof.)	機械工学	流体力学の応用	Dalles Dam	ダム付設のサケのバイパス・システム部分 の流体力学的設計
M. Gilbert P. Shecter	婦人研究 歴史	Client-based Eval- uation	Healthy Start	新生児・家族の生活改善 NPO 組織 "HS" の利用者による評価を実施。
M. Gilbert (Instr.)	婦人研究	"The Politics of Motherhood"	Healthy Start	有子女性に関する政策・法律などの改策形 成者の面接調査と評価



M. Gilbert P. Shecter	婦人研究 歴史	婦人団体・組織の歴史調査研究	Portl. YWCA, North-east Center Branch	6・70年代のYWCA その他女性の生活・活動の資料収集と歴史の調査と執筆
K. Gillespie D. Sutherland	都市研究	African American 児童の状態研究	Portland Urban League	ポートランド都市部のアフリカ系アメリカ人の子供の状態研究
D. G-Haight	公衆衛生	大学生の健康ニーズの評価	Portland State University	健康増進プログラムの実施のために PSU 学生の健康ニーズ評価を行った。
L. Haggerty (Prof.)	社会学	フィールド・ワークの実施	Southeast Uplift (地域向上運動)	Portl.南東地区 "Inner Southeast Plan" の開発のための Field Work
D. Hall H. Migliore	電気工学 機械工学	縁石乗り上げ可能な車イスの設計	車イスの使用者と製造者	縁石上下可能な車イスの条件、リフト・システムの設計・モデルの製造
K. Jone	法学	不動産所有者とテナントの法律	学生、一般市民	不動産所有者とテナントの権利のガイドブックを作成
B. Messer	都市研究	"Sustainable Portland"	環境サービス局、エネルギー局 (Portl.)	市役所と協力し環境プログラム執行・改善に関しビジネス・市民に助言
H. Migliore (Prof.)	機械工学		Tektronix	
L. O'Donelle	国際関係	移民問題	Sponsors Organized to Assist Refugees	SOAR と協力し最近来た移民と交流し社会的文化的ニーズに応える
L. O'Donelle	国際関係	難民の再定住問題	ポートランドの再定住難民	再定住難民家族に移転情報を与え、社会サービス機関の案内書を作成
J. Plattner	数学	中学校の数学・科学のチューター	Portsmouth Middle School	中学生のチューター (数学・学際的科学) の実施とチューター教材の作成
G. Recktenwald (Assoc)	機械工学	新空冷システムの設計	Industry Design Corporation (IDC)	電子装置製造用のクリーンルームに新空冷システムを応用
A. Rockhill	児童福祉	福祉改革・政策の検証	Steps to Success	STS と協力しオレゴンの福祉改革の最新の研究を吟味し福祉政策を分析
P. Shecter (Assis. Pr)	歴史	ポートランド YWCA の歴史	YWCA	YWCA と協力しその歴史を調査・解釈し公開発表 (第2次大戦期中心)
G. Spolek (Prof.)	機械工学	省エネと費用効果	Portland General Electric	PGE の省エネプログラムの費用効果の評価と模範システムの設計
B. Tinnin (Prof.)	生物学	公園の自然資源目録の作成	Tualatin Hills Park & Recreat. District	公園・湿地・公用地を含む左の自然公園地区の自然資源の目録づくり
D. Turcic (Assoc. Pr)	機械工学	印刷機のデザイン変更	Hewlett-Packard (電子計測器メーカー)	HP 社の現存印刷機の部品取り替えによるデザイン変更 (低費用高品質)
L. Weaver	Portl. Ed. Network	中学校のカリキュラム改革	Northeast Community School	NCS と協力し中学校カリキュラムを改善し実施する
C. Wern (Assis. Pr)	機械工学			

## (2) 97-98 年度の事例

Capstone 担当教員	Dept. (所属)	Capstone Title (テーマ)	Community Partner (地域連携組織)	学習プロジェクトの内容
H. Migliore	機械工学	Engineering Industry	Daimler Benz	ソーラーカー・モーターの開発 (営利)
同	同	同	Huntair	mobile clean room の創出費用の見積もり (営利)
同	同	同	Consolidated Metco.	スピードと信頼性を高めるパーツ点検の自動マシンの設計 (営利)
同	同	同	Boeing Commercial Airplane Group	差動ギアの耐久性のテストの開発 (営利)
同	同	同	OMSI	OMSI の Reed College が設計した電気自動車の実行可能性の研究 (営利)
同	同	同	Engineering & Machine Design Inc.	スピード・効率を上げるための pallet stacker のパートの設計 (営利)
D. Hall	電気工学	同	Consolidated Metco.	溶解金属の輸送コンヴェイア・システムの開発 (営利)
R. Blazak	社会学	Northeast Community School	Portland Public Schools	年少者のカリキュラム・プログラムの開発 (教育)
B. Messer	都市研究	Portland's Watershed (河川流域)	環境サービス局	"Sustainable Portland" の出版 (政府・環境)
P. Antoine B. J. Repp	社会学	Salem Center-Sheriff's Office	Marion County Sheriff's Office	Marion 郡のシェリフ・オフィスの調査の企画・実施 (政府・治安)
L. O'Donnell	国際関係	Global Portland, SOAR	Sponsor's Organized to Assist Refugees	宣伝用のパンフ・資料の作成 (非営利・社会サ)
T. Bulman (Assoc. Pr)	地理	応用 フィールド・ワーク	Portland Public Schools	ポートランド公立学校のカリキュラム開発 (教育)
F. Wambalaba	黒人研究	Global Portland IRCO	International Refugee Center of Oreg.	Web page, リソース・ハンドブック, ニュースレター (非営利・社会サ)
A. Rockhill	児童福祉 Prtnership	婦人, 貧困と福祉改革	Steps to Success	福祉受給者との直接交流 (非営利・社会サ)
J. Mason K. Gillespie	政治学	アフリカ系アメリカンにおける HIV/AIDS	Portl. Urban League HIV/AIDS Interv. Proj.	調査の実施と経験の物語化 (非営利・社会サ)
S. Henry K. Gillespie	教育学 政治学	Parkrose Project	Parkrose High Sch. KD 公立学校教育長	Parkrose 高校とコミュニティ諸施設の歴史 (教育)
D. Bufton M. Gilbert	婦人問題 婦人問題	Healthy Start	Healthy Start	H. S. の家族支援プログラムの評価・企画・実施・報告. (非営利・社会サ)
A. Mussey P. Schechter	歴史 歴史	Portland YMCA	YMCA of Greater Portland	Camp Westwinds History のための web page (非営利・社会サ)
M. Beeson	地質学	コロンビア川流域の地質	USDA Forest Service	パノラマ展示, バンフレット, 旅行展示, web page (政府・環境)
K. Cushing	LS	多様な住民層の連結		ニュースレターの執筆 (非営利・社会サ)
同	LS	同	ポートランド市	ニュースレターの創刊 (政府・社会サ)
同	LS	同		ニュースレターの創刊 (非営利・社会サ)
同	LS	同	Multnomah County Sheriff's Office	ニュースレターの執筆 (政府・治安)

T. Dillon	英語	M u l t n o m a h County Correc- tions	Multonmah County Corrections (監獄)	community policing program の評価を立案 (政府・治安)
同	英語	IAM Cares	IAM Cares	身体障害者の雇用の推進ビデオ (非営利・社会サ)
S. Franz C. Reynolds	健康科学 CAPS	Peer Health Edu- cators	ポートランド公立学 校 (PSU)	体育学部のための健康プログラム (PSU)
S. Huff D. Richwine	C i v i l E n g i - neer.	Engineering Pro- ject Management	(営利)	
C. Morgaine		Childhood Care と 教育の専門化	ポートランド公立学 校	教育訓練システムと評価 (教育)
J. Plattner	数学	Parent Math Workshop	Lake Oswego Public Schools	親と生徒のための Math Fair (教育)
F. Schuler (Assoc. Pr.)	歴史	Latin American Trade Council of Oregon	Latin American Trade Council of Oregon	LATCO ニューズレター (非営利)
W. Tate (Prof.)	演劇芸術	Group Perfor- mance Workshop		中等教育の生徒を啓発し方向づけるための 教材・活動の工夫 (PSU)
同	演劇芸術	Mainstage Sup- port Project		同 (PSU)
A. Zeiber (Assis. Pr)	経営学	AIESEC Oregon	AIESEC	PSU キャンパス組織のビジネスプランの開 発 (PSU)
C. Abbott (Pr) S. Adler (Pr)	都市研究	商業地区の再開発	ポートランド市	ニーズ評価と reflective writing のレポー ト作成 (政府・社会サ)
G. Cabello (Prof.)	外国文学	ヒスパニック社会 への参加	Donald E. Long School	生徒のチューター (非営利・教育)
K. Carr (Assoc. Pr)	歴史	ローマの文明	ポートランド公立学 校	Webpage の設計 (教育)
G. Dodds (Prof.)	歴史	Lents Community の歴史	ポートランド公立学 校 (Lents School)	歴史レポートの作成 (教育)
M. Gilbert (Instr.)	婦人問題	婦人の社会的変化	All Womens's Health Services (AWHS)	生殖の権利の提示 (非営利・社会サ)
J. Arante	英語	文脈的学習プロ ジェクトの設計	公立学校 (North Clackamas 学区)	公立学校で TA として従事, その経験につ いて反省日誌を作成 (教育)
B. Green H. Maynard	心理学 心理学	コミュニティ心理 学 (NP 社会サービ ス)	Healthy Start	コミュニティ機関の問題の処理・調査, 口 頭・文書発表 (非営利・社会サ)
同	同	コミュニティ心理 学 (政府社会サービ ス)	コミュニティ・家族 サービス局 (州)	同 (政府・社会サ)
H. Maynard B. Green	心理学 心理学	コミュニティ心理 学	Community Advo- cates	ニューズレターの出版 (非営利・社会サ)
S. Polishuk	婦人問題	Radical Elders	Oregon Historical Society (OHS)	OHS におけるインタビューの実施と発表 (非営利・教育)
L. Shainsky	科学教育 センター	森の生態学	Wolfree, Inc.	青少年のための環境プログラムの設計 (非 営利・環境)
R. Bremmer T. Dillon	英語 英語	Multimedia Production	Computer People, Inc. -Portland	トレーニング・ビデオの開発 (営利)

B. Grodd	英語	非寛容の歴史	Irvington School Capitol Hill School	“寛容の自覚” フェアの実施 (教育)
S. Vetter W. Lang (Pr.)	歴史 歴史	地域史のプロジェクト	Et. Vancouver National Historic Site	ビデオの絵コンテの作成 (史跡) (政府・教育)
S. Vetter D. Stuphen	歴史 歴史	地域と環境	Johnson Creek Watershed Council (JCWC)	JCWC のために Johnson Creek Watershed の歴史を執筆 (非営利・環境)
M. Cummings (Prof.)	地質学	Malhuer Field Station	Great Basin Society Inc.	公的データに関する冊子・web page・地図の作成 (非営利・環境)
A. Fullerton (Assoc. Pr.)	特殊教育	身障者からの学習, 身障者について学習	Mt Hood Kiwanis Camp, Inc.	身障者のためのキャンプ・カウンセラーとして従事 (非営利・教育)
E. Bodegom (Prof.)	物理	天文学 (最後のフロンティア)	ポートランド大学	望遠鏡の互換 web site の開発 (教育)
J. Doty	経営管理	“子供の友”	Friends of the Children	マーケティング・プランの作成 (非営利・社会サ)
M. Goldberg	経営管理	Community Group Marketing Plan	Ceder Sinal Park	マーケティング・プランの作成 (非営利・社会サ)
P. Niebanck	都市問題	大学のリーダーシップの肖像	ポートランド州立大学	コミュニティと大学の市民リーダーに関する冊子の作成 (PSU)
C. Palmer	Speech Communication	世代間接続	Robinson Jewish Home	ユダヤ人高齢者の自叙伝, スクラップブックの作成 (非営利・社会サ)

(資料 I に所収)